

制作から見えてくるもの

絵を描くことは自分を解放する手段でもあり、手や身体を動かしながら描く行為は生きている実感を持つることでもあります。制作のイメージとして、水が地中から湧き出ている泉や、水滴が上からぽたぽたと落ち、水が溜まっていくイメージを持っています。早く形にしようと焦ると、その水が枯渇するように画面から面白みが消えてしまい、それ以降の制作が進まなくなることが多いので、ゆっくりとじっくりと制作をすることを心がけています。また、ふと浮かんできた記憶やイメージをいつでも受け止めることができるようにしていきたいと思っています。

実際には、今まで見てきた風景や光景の記憶の断片を手がかりにして制作を進めていきます。記憶の断片は主に、雨や雲や雪、風に揺れ光や色と形を変化させていく草木や花、水溜まりや池、湖の水面、水が流れていく川や海の波などです。常に変化していくものに興味を持っています。日々の生活の中で、ふとした時に雲の隙間から見えた青空であったり、はっとする夕日であったり、いつもと違った時間の流れを感じる光景を形にしてみたいと思います。しかし、そういった光景の記憶を忠実に再現するのではなく、制作過程の道筋の手がかりにしていきます。

一筆一筆描いていくと、違うものへと変化していくことがあります。それをそのまま受け止め手を動かしていると、自然と思ってもよらない新たなものが画面から立ち上がります。

また、制作中の画面とのやり取りを通じて、その時その時で表現に合う素材や道具を選びます。キャンバスは麻布や綿布や帆布などで、木枠やパネルに張った後に下地作りをするのですが、時には下地作りの前に糸で縫うこともあります。縫うようになったきっかけは、東北地方の青森の刺し子の着物を見て、手仕事のあたたかさや強さ、作為のない美しさに衝撃に近いものを感じ、手仕事の集積を加えることで、より作品の強さを出すことができたなら、また、より表現したいものに近づけることができるのではないかと感じたからです。糸で縫う単純作業をしていると無心になれる時があります。

呼吸のリズムに合わせて縫っていくと、部屋の外から風の音や虫の声、人の生活の音が聞こえ、外の空気と一体となるような、その一部になるような感覚になることがあります。そして、画面上の点や線がふと前述したような風景の記憶の断片と重なり、次の工程の道筋が見えてくるのです。

一つ一つの制作過程の選択の集積から、点や線、色や形の反復から生まれるリズムが画面に立ち現れ、記憶と結びつくことで言葉として表現できなかつた何かが見えてくることにより、奥底に沈殿していた記憶を呼び起こすような作品を作っていきたいと思っています。